
哀しき愛

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀しき愛

【著者名】

NO237BA

【作者名】

ussa

【あらすじ】
彼とずっと一緒にいたと思っていた。

彼の一一番近くにいるのは、私だと思っていた。

彼女が現れる前は……。

彼女さえ、いなければ。

彼女さえ、いなくなれば。

お願い、彼を返して……！

パラレルです。

新蘭ですが、一部新志な表現もあります。

暗い志保ちゃんは見たくないという方はback願います。

気持ち

私の名前は宮野志保。

一七歳、高校一年生。

家族はない。

十年前、私の両親と姉は事故で亡くなつた。

それ以来、私は遠縁の阿笠博士に引き取られて暮らしている。

博士は優しい人。

突然現れた私を、何のためらいもなく受け入れてくれた。

時々変な発明とかしたりするけど、私にとっては父のような存在。

でも、どこか違うのを感じていた。

私と博士には、やはり何か壁のようなものがある。

本当の親子ではないんだから、当然といえば当然だけだ。

少し、寂しい。

それでも私は、ここが好きだった。

風変わりな老人の家、隣には大きな洋館。

小学校には銀杏並木があり、秋になるとそこをよく通つて帰つていた。

隣にいるのは、サッカーボールを蹴つている彼。

リフティングに百回成功したと笑つて、彼は私に向かつて、歯を見せて笑つていた。

私は呆れながらも、笑みを返した。

こういう時間が、何よりも幸せ。

博士といつよりも、学校で本を読んでいる時よりも。

私の大切な時間。

大切な彼。

私の…好きな人。

キラキラした笑顔が好き。

少し子供っぽいところが好き。

何もかもお見通しだつていう表情が好き。

彼の全てが、好き。

私と彼、工藤新一は幼馴染。

私が米花町に来たばかりの頃、隣に住んでいる彼は、気さくに私に話しかけてくれた。

最初は別に、なんとも思ってなかつた。

ホームズ、事件、サッカー好きの、ちょっと変わった男の子。

それぐらいにしか思つてなかつた。

私の彼に対する気持ちが変わったのは… そう、中学一年の六月。

帰る頃になつて、突然雨が降り出した。

私はその日、傘を持つていなかつた。

昇降口で雨がやむのを待つていると、私の前に、青い傘が差し出された。

「ほらよ。これ使える」

工藤君はそう言つて、私に傘を持たせた。

そのまま一人で走り出した彼を見て、私は別の傘はあるの?と声をかけた。

「バーロ。オレは探偵だぜ? こつこうことは想定済みだよ。ちゃんとここに、折り畳みの傘が入つてんだよ」

バッグを得意気に叩く。

「 もう…。 なら、 借りてくれよ
「 もう。 オレ寄るといつあつから、 じゃあなー。」

しばりくして私は気付いた。

彼、 昨日折り畳みの傘壊れたって…。

次の日、 彼は風邪をひいて学校を休んだ。

呆れる半面、 嬉しかった。

自分よりも私のことを思ってくれたことを。

この日から、 私は彼に夢中になっていた。

例え幼馴染でも、 彼の一一番近くにいるのは私。

これから先も、 ずっと。

そう思っていた。

気持ち（後書き）

私パラレル好きだな…。

これからよろしくお願ひいたします^_^(ーー)^\n

朝、博士が起きる前に私は目覚める。

今まで自炊していたのが嘘みたいに、料理が苦手な博士。

今では家事は、私の担当。

キッキンに立つて、朝食の支度を始める。

卵を三個取り出した。

なぜ三個なのかは、今にわかる。

卵を割つて目玉焼きを作つてみると、チャイムの音が鳴る。
普通だつたら、こんな朝から…と思ひけど、こりでは至つていつものこと。

私は急いで玄関に向かつた。

「おっす」

「朝から元気ね」

寝癖も直さないままに、上藤君はずかずかと上がり込む。

その無防備な様子も、私にとつては愛しい。

「博士は？」

「まだ寝てるわ」

そんな」とを言つてみると、上方から物音がした。

博士が欠伸をしながら降りてきた。

あ～あ、あんなにお腹が出ちゃつて…。

そろそろ本格的に、カロリー制限をせなくちゃね。

「はよ、博士」

「ん？ああ…新一君か。今日は早いの」

「今日はサッカー部、朝練あるんだってよ」

それを聞いて、私は不思議に感じた。

「あなた、部活はやめたんじゃなかつた？」

「そのつもりだけよ…中道が今度の大会だけでもつて言つからせ」

そう言つと、彼はテーブルに置いてあつた紅茶を勝手に飲んだ。

「しゃあねえから、その試合だけ出でやめる」

「きつとその次まで、つてくるわよ」

「断るよ、その時は」

「うかうか、と私は呟いた。

でも、彼には部活をやめほしくなかつた。

サッカーをやっている時の彼は、すくなく樂しそうだから。

「はい、できたわよ」

「サンキュー」

目玉焼きとソーセージ、トーストを二人の前に置く。

練習があるからか、工藤君はがつがつと食べていた。

「もう少し落ち着きなさいよ」

「そうじやぞ。せっかく志保君が作ってくれたご飯を……」

だけど、彼はわざと食べ終わって、紅茶でトーストを皿に流し込んでいた。

「わあつてゐよ。んじやな。先行くぜ、富野」

「はいはい」

あの髪で行く気かしら……。

多少の不安は残るけど、私は手を振つて見送った。

至つて普通の朝。

こんな普通の毎日が続いていくに違ひない。

彼と博士にて飯を作つて、彼を見送つて、自分も学校に行つて……。

一緒に帰つて、買い物に付き合つてもらつたり、少し寄り道をした
り。

また、ご飯を作つて、興味もない事件の話を聞かされて。

そんな日が続いていくと思っていた。

彼女が現れるまでは。

工藤君が出ていった後、私は一人で学校に向かう。

正直に言つて、私には友達と呼べる人は少ない。

この性格だし……ね。

教室のドアを開けると、一瞬だけ視線が集まる。

私だとわかると、皆おしゃべりを再開させる。

私は自席に向かうと、バッグを置いて、隣に向かっておはようと言った。

「おはよ、宮野さん」

鈴木さんは笑つて、また他の子と話しあじめる。

鈴木園子さんは、わたしと話してくれる、数少ないクラスメイトの一人。

大体の女子は、私が工藤君と仲が良いからと、勝手に憎んでいる。

私に対する陰口が少なくないことも知つていてる。

まあ、言いたい人は言つていれば良いわ。

「ねえねえ聞いた？今日は転校生が来るらしいよ。しかも女子のー。」

他の女子が話しているのが聞こえてきた。

「へ～え、どんな子だろ？」

「さあ。美人かな？」

「優しい子だといいね」

興味はないわ。

私は本を取り出すと、しおりが挟んであるページを開いた。

しばらくすると、ドアが開いて、サッカー部の部員が入ってきた。

私はチラシとしおりを見て、工藤君の姿を確認した。

「おー、何盛り上がってんだよ？」

中道君が女子の話題に割り込んでいる。

「今日、転校生が来るんだってさ」

「何？女か？」

「そうだって」

すると、相沢君まで面白がって加わった。

「美人か？」

「知らなーい」

「可愛い子だつたらアタックしてみるか」

「無理無理！」

クラス中がワツと笑いに包まれた。

やがてチャイムが鳴つて、担任が後ろに、別の学校の制服を着た女子を連れて入ってきた。

男子がざわめいたのがわかる。

「毛利蘭といいます。よろしくお願ひします」

毛利さんは大きな目を皿のようにして笑つた。

長い黒髪がふわっとなびいた。

美人

この一言がぴつたりな人だつた。

でも嫌みがない。

優しげな顔をしていて、女子もすぐに好感の目になつた。

でも…彼は違うわよね。

私はそつと、斜め後ろの席の工藤君を盗み見た。

だけど、なぜかしら。

工藤君が一番、彼女を真剣な目で見ている気がする。

気のせい…よね。

だけど、私の考えは違っていた。

毛利さんは工藤君の隣の席。

つまり、私の後ろ…。

彼女は、席に座る直前に、小さな声で言つた。

「久しぶりだね。新一…」

彼女

久しぶり?

新一?

私の頭の中に、その言葉ばかりがぐるぐると回る。

二人は、知り合い?

だけど、私がたずねる前にホームルームは終わり、クラスは元の騒がしさを取り戻した。

女子がわっと毛利さんの周りに集まる。

「よろしくね、蘭ちゃん!」

「部活は?何かやつてた?」

「彼氏とかいる?」

「私たちとも仲良くなしてね」

毛利さんはポカンとしつつも、笑顔を絶やさなかつた。

「ありがとう」

そう言って微笑む彼女は、天使のようだつた。

「あ、一時間目つて体育だつけ?」

「やつば。着替えなきや!」

「更衣室行こー」

「あたしらトイレで着替えるー」

時計を見ながら、女子が動き出した。

そういえば、私も制服のまま…。

私も席から立つと、ジャージを手に取った。

二人一組

この台詞が教員から出でると、無性にため息をつきたくなる。

私にはペアになってくれる人がいない。

皆さつさと決めていくし、わたしと仲良くなろうとする人もいない

から。

私が一人でやつていると、教員は必ず怒る。

それを影でクスクス笑っている人もいた。

でも、今日は違った。

私がいつも通り、バレー・ボールを持つて一人で端の方へ行こうとする、後ろから声をかけられた。

「あの、一緒にいい？」

毛利さんは遠慮がちに言つと、上目使いに私を見た。

どうやら、一瞬で気に入られたとはい、その日からグループに混ぜてもらえたわけではないらしい。

「いいけど

「ほんとに? 良かったあ

彼女の華のような笑顔に、私もつられるように笑つた。

「それじゃ、えつと……」

「志保よ。富野志保」

名前を教えると、彼女はなぜか私の手を握つた。

「よひしくね、志保さん!」

「え、ええ……」

周りから冷たい視線を感じた。

私が彼女と仲良くなるのが気にくわないらしく、女子が数人こちらを見ていた。

毛利さんは気が付いていないのか、無邪気に私の手を引いて歩き出した。

「志保さんは、こっちに来てからの私の友達一号ね」

バレーのレシーブ練習の合間、彼女は言った。

「うわすれあんまり知り合いがいなくて…色々教えてね」

それを聞いて、私はわざわざの工藤君と彼女の会話を思い出した。

「あなた、工藤君と会つたことあるの？」

少し間を開けてから、彼女は頷いた。

「まあね。幼馴染なんだ。といつても、十年前の話だけど」

「幼馴染…？」

私は聞き返した。

「うん、そう。新一もね、十年前は私と同じ町に住んでたの。家が近くで、両親も仲が良かつたから、よく一緒に遊んでたんだ」

十年前といえば、私と彼が初めて会つた頃。

その少し前に、彼はこいつに越してきたとは聞いていたけど…。

「アイツ、まだホームズの話とかしてる？迷惑でしょ。あのホームズオタク」

「そ、そ…」

「今はなんか、有名になってきてるみたいだけじ、その「うち絶対変な事件に巻き込まれちゃうんだから。ねえ？」

その後も続く、彼の愚痴。

でもそれが、自分への嫌味に聞こえてくる。

まるで、私は彼のことを、こんなに知っているの、とでも言つようにな…。

いや、聞きたくない。

彼女といたくない…！

そこで、ホイッスルの音が鳴つた。

「はー、一旦集合ー！」

教員の号令で、私はホツとして彼女から離れた。

彼に一番近いのは私と思っていた。

でも違う。

彼に一番近いのは、彼女なのかもしれない……。

家に帰ると、私は一人で夕食の支度を始めた。

でも、頭に浮かぶのは彼女。

天使のように優しげな笑顔で、誰からも好かれていって…。

敵わない。

敵いつこない。

あんなに素敵な人が、もしも彼を好きなら…。

私には到底、歯がたたない。

ため息をついていると、後ろから博士が来た。

「どうした、志保君」

博士はいつものように、優しく聞いてくれた。

「何でもないわ。夕飯、もうすぐできるから…」

私はそつまつと、包丁で野菜を切りはじめた。

「そうか…。そういうば、そろそろ新一君も来る時間じゃ。腹を空かしておるぞ」

博士が時計を見ながら言った。

今日も彼は、きっとこの家で夕食を食べるはず。

そうだ。

例え彼女と工藤君が幼馴染でも、私も彼の幼馴染の一人。

そして今、彼と一緒に時を過ごしているのは私…。

そう考えると、私は肩の力がすっと抜けた。

「 さうね、博士…」

私は博士に返事をすると、先程よりも軽快なリズムで包丁を動かした。

今日はカレーを作っている。

練習で空腹の彼のために、いつもよりも多めに。

早く来ないかしら…。

そこへ、私の携帯が鳴った。

表示されていた名前を見て、私は急いで通話ボタンを押す。

「 もしもし?」

「 ああ、富野。もう飯、作っちゃったか?」

電話の向こうから聞こえてくるのは、上藤君の声。

「ええ。どうかしたの？」

私がたずねると、彼は少し気まずさつて言った。

「わりい。オレ、今田はバス」

「え？」

「友だちとこれから食つに行つた。あ、明日、お前の飯は食つからさ」

彼の必死な様子が目に浮かぶ。

「別にいいわ。気をつけてね

「おひー。」

そつ言つと、彼はあつさつ電話を切つた。

少し寂しいけど……仕方ない。

「新一君は来ないのか？」

「ええ、みたいよ」

「そうか。せつかくの夕飯が……」

博士が残念そうに眉をハの字させた。

「しようがないわ。私達だけで食べましょつ

「そつじやな……。わしもたつぱり食つだ

「博士はサラダ」

「え……？」

寂しさを堪えて、私はカレー作りに戻った。

でも、さつきよりもやる気が出ない。

私も意外と、現金な人だったのね……。

結局、その日は工藤君に会うことはなかつた。

何度も彼の家の方を見たけど、明かりがついてなく、真つ暗だつた。

翌日、私はいつも通りに早めに起きて、朝食を作つていた。

今日こゝは来てくれるわよね……？

そう思つていたけど、待てども待てども、彼は来なかつた。

「やけに遅いの、新一君……」

「寝過ごしてるのかしら？」

「ありえるな……志保君、少し様子を見てきてくれんか？」

「はいはい」

私はコーヒーの入つたカップを置いて、いかにも面倒そうに立ち上がりつた。

心の中は、はずんでいるのに。

隣にある、彼の家のチャイムを鳴らしてみる。

だけど、なんの反応もない。

もう一度押す。

結果は同じ……。

「どうしたのかしら……。

私が工藤君の家を見上げてみると、聞こ覚えのある声がした。

「志保やーん!」

「なぜ…彼女がここにいるの?」

「なぜ、彼と一緒になの?」

「おはよー、志保やん」

「お…おはよー」

私は上ずつた声を出してしまった。

視線が上に行くと、彼がいつもと同じ笑顔で私を見ていた。

「よつ。わりいな。昨日はここにうち泊まつてたからよ」

泊まつてた…?

「あ、ここはオレの幼馴染でさ……」

「知ってるわ」

工藤君は少し驚いたような表情をした。

「蘭と話したのか?」

蘭：

「昨日体育の時ね。新一のお隣さんなんて、志保さんも大変ね」

新一：

「それどうこう意味だよ？」
「そのまんまの意味よ」

名前で呼び合つ二人。

仲の良い二人。

幸せそうな二人…。

逃げ出したくなつた。

「富野、遅刻すっから、早く行こうぜ」
「あんた、その頭で行く気？」
「あん？」

工藤君がきょとんとしているところ、彼の髪を引っ張る彼女。

「この寝癖、直してからにしなさこよ
「わ、わかったよ、いつてえな」

私はここに無き者。

いらない存在…。

「悪いけど、あなた達先に行つてくれる?」

「これ以上、二人の傍にいたくない…。」

「いいけど…どうかしたのか?」

「何でもないわ。すぐ行くから!」

そう言つと、私は走り出した。

家の中に入つて、ドアを後ろ手で閉めた。

呼吸が荒くなつている。

「どうしたんじや、志保君。新一は?」

博士が慌てたよつて出でてきた。

「大丈夫、起きてたから…」

「そ、そつか」

テーブルにはまだ、温かいコーヒーとトーストがあつたけど、食べる気にもなれない。

「博士、これ食べていいから」

「えつ? い、いいの?」

私は答えないまま、鞄を手に取つた。

「行つてきます…」

「き、気をつけるんじやだ」

博士に見送られながら、普段よりゆっくり歩く。

顔をつつ向かせて、絶対に一人の姿が見えないようになり…。

からかい

一人よりたつぱり一十分は遅れて、私はぎりぎりで学校に着いた。

教室のドアをそっと開ける。

だけど、今日は誰もこっちを見なかつた。

それどころか、私が入ってきたことすら、全然気付かない。

皆何かに夢中になつて、ひと塊りになつてゐる。

私は氣になりながらも、席に着こうとした。

でも、クラスメイトが邪魔で座れない。

輪の中心は私の席の後ろの、あの一人だつた。

私は小さな声で「ごめんなさい」と言つて、椅子を引いた。

すると、ホッとしたような毛利さんの声が聞こえてきた。

「志保さん、ちょっと…」

「…何？」

クラスメイトの冷たい視線が刺さる。

「ねえ、志保さんからも何か言つてよ。何だか変なことになつちや

つて……

そう言われて、私は周りを見た。

思えば、全員が彼女と工藤君を「ヤーヤーしながら見つめていた。

「どうかしたの？」

すると、一人の女子が楽しそうに告げた。

「私さつき見ちゃったのよね～。一人が手を繋いで、超仲良しそうに歩いてるとい～」

「私も～もうラップラップな恋人？みたいな感じでさ～」

彼女たちが顔を見合せながらねえ、などと言っているのを横田に、私は再び傷ついていた。

私と別れたあと、一人は手を繋いで……。

「ち、違うつてば～あれはたまたま…新ーーあんたも何か言いなさいよ」

毛利さんが彼の名前を呼ぶと、男子達が口笛を吹いた。

「あの時はほんとに、私が転びそうになつたから…」

「そ、そうーただの事故だつて」

二人が必死になつて否定する。

「え～？そんなこと言つて、ほんとは付き合つてんじゃないの？」

鈴木さんが面由をうにたずねた。

「そういえば、」の人はそうこう話題好きだつたような…。

「お似合いよ、お一人さん！」

鈴木さんが一人をからかうと、隣にいた子がポンと肩に手を置いて言つた。

「そんなこといつたらわあ…ほら」

チラッと私の方を見る。

一瞬ドキッとする。

「この人はきっと、私が彼を好きだということを知つてこる。

「何よ？」

鈴木さんはつまらないうに言ひ返していく。

「わかんないの？それ言つちやつたら可哀想でしょ」

「誰が？」

「それはさ…」

クラスメイトの田が、段々私に寄つてくる。

勘弁して…！

「さつき虫が近づいてきたから、私が思わず新一に抱きつこうやつたの！」

場違いな叫び。

毛利さんが顔を真っ赤にさせて息を整えていた。

「ら、蘭ちゃん…」

女子たちがポカンとしながら、彼女を見つめていた。

「これでいいでしょ。あれはたまたま起きた事故よー。」

そう言こると、彼女は椅子に腰を下ろした。

「ほんとか、工藤？」「

男子達が面白くなさそうにたずねる。

「そ、そうだよ」

「だつたら最初からそう言えよな」

「言つただろーが！」

やがて、二人の周りからクラスメイトも散りはじめた。

時折、女子が私に馬鹿にしたような目を向けてきた。

たぶん彼女たちは、私の気持ちを知っていて、あからさまに一人をからかった。

心を乱さないで…。

例え一人で歩いていても、手を繋いでいても、大丈夫。

彼に一番近いのは、この私…。

思い合つ一人

移動教室の途中、後ろから肩を叩かれた。

「志保さん。一緒に行こう。」

毛利さんは相変わらず笑顔で言った。

私が無言でいると、構わず毛利さんは私の横に並んだ。

「理科室まで遠いんだね。私、方向音痴だから……」

「そう。」

興味はない。

どうせ彼女は、私の敵。

「うして私のこと、馬鹿にしてるんでしょ？」

「志保さんは、他の人と一緒に移動したりしないの？」

「しないわ」

見ればわかるの。

「でも園子言つてたよ。志保さんは本当はいい人なんだって

「……園子？」

「うん。そう呼んでつて言われたから」

小学生の頃も同じだった私ですが、名字なのに。

何もかも、彼女に劣っている。

ルックス、性格、友情、恋愛…。

どうして？

「新一もね、志保さんには感謝してるって。あいつ、素直じゃないから、あんまりそういうこと言わないと思ひけど…」

新一

その言葉が出るたびに、私の心臓が何かに掴まれる。

苦しくて、もがきそうになる。

「志保さん…？」

彼女が私の顔を覗きこむ。

私はすぐに目を逸らした。

その時、男子が私たちの脇を走って通り過ぎた。

もちろん、その中には工藤君の姿もあった。

一瞬、彼がこっちを見た気がした。

でも、私を見ていない。

彼は彼女を見ただけ。

彼女もしつかり、彼を見ていた。

たったそれだけで、すごく苦しくなる。

私が俯いていると、彼女は私に、小さな声で言った。

「志保さんで、新一のことが好きなんでしょう？」

「え……？」

思わず顔をあげて、彼女を直視する。

「や、そんなこと……」
「すぐわかるよ」

彼女は笑顔を絶やさないまま続けた。

「私と同じ田をしてるもん」

同じ……田……？

「どういう意味？」

彼女は少し照れたような表情をした。

「今の志保さん、私と同じ田をして、新一を見てる」

そういう彼女の顔は、少し赤くて……。

女の私でも、素直に可愛らしいと思えた。

でもそれは…彼を思つてゐるからにその表情。

彼女は彼が好き。

そして彼も、きっと彼女が好き。

思い合つてゐる二人…。

私の入る隙間は、一ミリたりともない。

「あ、もう始まっちゃうー早く行こー、志保さん」

呆然としている私の手を、彼女は優しく引いた。

温かくて、柔らかい。

自分の冷たい手を、思わずぐっと固める。

負けたくない。

私よりも遙かに優れているこの人から…。

彼だけは取られたくない。

絶対に。

最近、彼はうちに来なくなつた。

朝も夜も、どこか別の場所に行つてゐるらしく。

博士も心配しているみたいだけど、あまり色々と言わない方がいいと言わた。

聞かなくともわかる。

彼はきっと、彼女の家に行つてゐる。

彼女の家で、食事をじて馳走になり、泊まつてへることもあくなつてゐる。

彼との時間が減つていく。

学校でも滅多に会話をしなくなつた。

帰り道も、私は一人だった。

買い物の時、さりげなく荷物を持ってくれる彼の大きな手は、もういない。

そして増えていく、彼女との時間。

目を向けて見れば、必ず毛利さんと楽しげに話をする彼の姿。

その中には、彼女に対する気持ちがこもつて……。

私は唇を噛んで、目を逸らすことしかできなかつた。

二人へのからかいが増えるにつれて、私の中の黒い心が大きくなつていいく。

彼女が憎くて、疎ましくて、消してやりたいと思う心が……。

だつてそうでしょう?

彼女がいなくなれば、彼の一一番近くにいるのは、私だけ。

例え彼が振り向いてくれなくとも、私はずっと、彼の傍にいることができる。

そうよ。

彼女をいなくなれば……。

彼女さえ、いなくなつてくれれば！

ねえ、あなたは私よりも、いろんなものを持っているでしょう。

一つぐらいくれたつていいじゃない。

私がほしいのは、彼だけなんだから…。

彼を返して…。

返し手一.

私の彼を返して！

黒い心

毎日彼女は、私に声をかける。

「志保さん、おはよ！」

「ねえ志保さん、お弁当一緒に食べよ！」

「志保さんって、頭いいのね」

「羨ましいなあ」

決して嫌味ではない」とはわかっている。

それどころか、彼女が私と仲良くしようとすることも。

でも、私の中の黒い心が邪魔をして……。

「放つておいてくれる？」

つい冷たい言葉が漏れる。

だけど、彼女は少しも動じなかった。

「そっか、『めんね』

いつも通りの笑顔を浮かべて、また去っていく。

それでも帰りになれば、また彼女は現れる。

「志保さん。一緒に帰ろうつ」

私が無言で進んでいくと、彼女は少し距離をおいてついてきた。

「私、これから用事があるんだけど」

「ぶつきりひびきに嘘を吐く。

「じゃあ、途中まで。ね？」

毛利さんはそうついて、ついに私の隣に並んだ。

その後も、彼女は返事もしない私を相手に、様々な話をしていた。

喧嘩ばかりの両親、父親の仕事、小さこ頃の思い出、彼とのこと。

「新一って、小さい頃からホームズオタクでね。家にあつた大きな本棚に、ホームズの本がぎっしり入つててさ……」

私はできる限り、彼女の声が耳に入らないようにした。

「今でも同じみたいだし。ほんと困っちゃうよね。いつもホームズ、ホームズつて……」

急に彼女は立ち止った。

「…新一」

私は彼女の視線の先を見た。

工藤君が手を振りながら、一歩一歩に向かって走ってきていた。

「よつ。珍しいな」

工藤君は私達を交互に見つめた。

「新一、サッカー部の練習じゃ……」

「今日はもう上がり。帰ろ」

「あ、ちょっと!」

スタスタと歩きだす工藤君を、毛利さんが慌てて追いかけた。

私はしづらしく、その様子を呆然と見ていた。

傍から見れば、恋人も同然の雰囲気。

やつぱり私には、入る隙間がない。

「富野? どうした?」

「志保やーん。早くうー!」

少し先では、一人が私を呼んでいる。

私はのろのろと進んだ。

これが夢だつたらいいのに。

今すぐ目が覚めて、全部夢だつたら…。

「お前、相つ変わらずだな」

「あんたに言われたくないわよ」

そつ言いながら、クスクスと笑う。

私がいふことを忘れているんじやないかと思つまど、一人は仲がよ
くて……。

引き裂いてやりたい。

彼女の肩を掴んで、思いつきり彼から引き離してやりたい。

あと一歩の所で、それができない……。

私は唇を噛んだ。

血が出てきそうなほど、強く。

信号を待つ間も、一人は夢中で話していた。

時折、彼女が振り返つては私の同意を求める。

だけど、それ以外ほとんど私は会話に加わっていなかつた。

それよりも、彼女に対する憎悪が……。

私の黒い心が……。

私の脳裏に浮かぶ、恐ろしいこと。

それが、車の音でかき消された。

「 いこゝ、車の通りがすいぶん激しいね…」

彼女がポツツと漏らした。

「 雨の田に通つたら、大変そうじゃない?」

などと言つて、一人で笑い合つ。

私はぼんやりと顔をあげた。

今まで意識していなかつたけど、 いこゝはかなり車がたくさん通る。
人と車の接触事故も多いと聞いた。

「 いこゝで… 彼女を押したらどうなる…? 」

ふと、そんなことが私の頭をかすめた。

私は怖くなつて、頭を振つた。

だけど、手はすでに前に出ていた。

やめなくちゃ…。

そつ願つてゐるのに、体がいつことをきかない。

黒い心はすでに、私の身体も支配していた。

思わずぎゅっと手をつぶつた。

私の手に、一瞬だけ重みを感じた。

でもそれは、すぐに軽くなつた。

耳をつんざくブレー キの音。

人々の悲鳴。

私は恐る恐る目を開けた。

彼女が、いない。

私が……押したから……？

だけど、それは違つた。

「誰か轢かれたぞ！」

「救急車だ！早く！」

「おいボウズ、大丈夫か？」

そんな声が聞こえてきて、私はハッとした。

車道の真ん中に人だかりができていた。

その中心でぐつたりしていた人が見える。

その人に、毛利さんが泣きながらすがつっていた。

「新
一
い
！」

工藤君
…！？

たくさんの人

止まる車

悲鳴

泣き叫ぶ彼女

血まみれの…彼

何が起きたんだろう。

私は間違いない、この手で彼女の背を押した。

なのに彼女には傷一つなく、工藤君はあんな大怪我を…。

私は震える足で、工藤君に近付いた。

「工藤君…？」

毛利さんは私を見上げた。

殴る？

怒鳴る？

私は目をつぶった。

だけど、彼女は私の肩に手をおくと、がたがたと震えだした。

「志保さん……びしきょう。新一が…新一が…」

彼女の大きな目に涙がたまる。

「私がいけないの。ちょっとよひけて道路に出来りやつたから…。新一はそれを庇つて…私の背中を押してくれたの。だから…」

私は混乱した。

彼女は、私が彼女を突き飛ばしたこと、気付いていないのだろうか。

「お嬢ちゃん達、この坊主の友達か？」

救急隊員らしき人が来て、私達にたずねた。

私は答えられない彼女の代わりに、少しだけ首を縦に動かした。

「じゃあ一緒に着いてくれるか？色々、聞きたい」ととあるから、「

そつ言つと、隊員は私たちの肩をポンと叩いた。

「大丈夫だ。坊主は助かる」

本当に、大丈夫なのだろうか。

震えがまだ止まらない。

もし…彼がいなくなつてしまつたら…。

私は生きていけない。

だつてこの事故は、私が引き起こしたもの。

私が彼女を恨まなければ…。

私と彼女が出会わなければ…。

私と彼が出会わなければ…。

こんな事は、起きなかつた。

彼は今も、笑つていた。

例え隣に私がいなくても、彼はずつと、笑つていろことができたのに。

「志保さん…」

救急車の中で、彼女が呟いた。

「新一…助かるよね？」

私は答えられなかつた。

堅く目をつぶつて、応急処置を受けている彼の姿から、目がそちらはない。

逸らしてはいけない。

彼が今こいつなつたのも、全部全部、私のせいなんだから…。

彼の指先が、ほんの少し動いた。

「新一…？」

彼女が急いで、彼の手を取つた。

「新一…わかる？」

工藤君は、薄くだが目を開けた。

瞳をゆらゆらと揺らしていたけれど、彼女の姿に目を止めるとい、微笑んだ。

そして、呼吸器をあてたまま、口を動かした。

「怪我…ねえか…？」

そう聞こえた。

こんな大怪我をした自分よりも、まず彼女のことを心配する彼。

毛利さんも一瞬困惑したあと、「いや」と頷いた。

「私は平気だよ…。ありがと、新一…」めんね…「めん…」

彼女は涙を流しながら、何度も謝った。

「謝んなよ…オレが、勝手にやったんだからよ…」

そう言つと、彼は目を閉じた。

「工藤君！？」

「新一、どうしたの！？」

私達は慌てて彼を揺すった。

すると、救急隊員の人気が驚いた様子で止めた。

「だ、ダメですよ。今は安定してますから大丈夫です。眠つただけ
ですよ。そんなことをしたら、余計に出血が…」

「す、すみません…」

彼女は俯くと、もう一度彼の手を握った。

「私のせいだね…いつもいつも、守つてもうつて…」

彼女の顔に、いつしか笑みが浮かんだ。

「ねえ新一。新一っていつもそつだよね。冷たいように見せかけて、
こいこいという時に駆けつけてくれて…。いいとこ取りだよ。馬鹿…」

彼が笑つたように見えた。

やつぱり私は、 いらない存在。

ここにいては、 いけない人間。

私は人殺しも同然。

この世で一番大切な人を、 こんな目にあわせた。

この世で一番大切な人の一番大切な人を、 こんなにも苦しめている。

彼の一番近くにいるのは、 彼女だ。

私ではない。

工藤君はそのままのまゝ、元気な元気な、米花総合病院へ緊急入院した。

出血があつたけど、そこまで傷は深くなかったらしく、命に別条はないらしい。

良かった…。

すやすやと眠る彼の顔を見て、私はほつと胸をなでおろした。

彼の手を握つたまま毛利さんも寝付いてしまい、私は心苦しさを覚えながらも彼女に上着をかけた。

私はそのまま、病室をあとにした。

家に帰ると、電話をもらつたといつ博士が慌てた様子で彼の両親に連絡を取つていた。

私が彼の容体を知らせるべく、博士は安心したよつとそれを話していくた。

「優作君達も、近いうちに一度帰つてくるそつだ」

「そつ。それまでに工藤君も良くなつてこるといいけど

私は敢えて明るく振舞つた。

「うでもしないこと、罪悪感に押しつぶされそうになる。

「夕飯、作るわね…」

喜ぶ博士をまともに見ることができず、私は俯いたままキッチンに立った。

包丁を動かす間、私の脳裏に、先程の様子が蘇つていた。

行き交う車、笑い合う二人、黒い心に浸食された身体、一瞬だけ触れた背中、人々の悲鳴、車のブレーキ、すがる彼女、横たわる彼…。

忘れよう、忘れなきや。

記憶をふつとるかのように、包丁を更に早く動かす。

それでも頭の中では、ずっとあの時の映像が流れていって…。

「いたつ…」

指から赤い血が出てきた。

包丁で切つたらしい。

指を咥え、止血をしている間、涙が出てきた。

彼は「これよりも、遙かに苦しんだ。

苦しめたのはほかでもない、この私…。

翌朝の空は、私の心とは正反対の快晴だった。

外に出て思わず、額に手をやつた。

太陽のこの眩しさは、私には痛すぎる。

顔をうつむかせながら、私は学校へ向かつた。

教室のドアを開けたら、いつも以上に視線が集中した。

それも当たり前なんだろうけど……。

私はそれを無視するかのように、席についた。

でも、私の前には数人の女子がいた。

「ねえ、工藤君が事故つたって聞いたんだけど？」

中心にいた、隣のクラスの工藤君のファンの子。

確か名前は……織田美由紀。

その子が私を睨んだ。

「ええ、そうよ」

「何その返事。幼馴染がそんな目に遭つたのに、心配してないわけ？」

私は思わず睨み返した。

「そんなわけないでしょ？」「

「どうだか。工藤君、このクラスの女の子底つたんでしょう？ その子じこよ」

私は口を固く闇やした。

毛利さんの眼前を出すのは気が引けた。

「あんただつてその子の事、恨んでんじやないの？」

織田さんが言つと、他の女子が同調して言つた。

「そうね？ 工藤君、最近その子にべつたりみたいだし？」

織田わんたちが一斉に笑つた。

「もしかして、その子を突き飛ばしたの、あんただつたりして」「やだ～。逆恨み？」「

「女の嫉妬つて、醜いわよねえ」

団星をさせれ、私は何も言えなくなつた。

「あれ～？ 何も言わないの？」

「まさかマジでやつちやつた？」

「ちよつと皆注目～。ここに殺人犯がいまーす

その言葉に、私は顔をあげた。

「彼は死んでないわ。ちゃんと生きてる
あなたが言えることじゃないでしょ」

織田さんは冷たく言った。

私はぐつと歎息を吐んだ。

その通りだった。

私にそんなこと言つ資格はない。

彼をあんな目に遭わせたのは、私なんだから。

その時、教室のドアが開いて、毛利さんの顔が見えた。

顔が青白く、おはよつとこつ声には元気がなかつた。

「当事者、立候場～」

織田さんは一矢二矢としながら、毛利さんの腕を引っ張つた。

「な、何？」

毛利さんは混乱したように言つと、私の顔を見た。

私はつい、視線を逸らした。

「毛利さんって言つたつけ？昨日の事故のことなんだけど」

織田さんからの言葉に、彼女の顔が曇つた。

「あの時毛利さん、誰かに背中押されなかつた？」

楽しげな顔をして恐ろしことを聞く織田さんに、彼女の表情も強張つた。

もう私はおしまいだ。

これで私は、完全な犯罪者だ。

そう思つて私は俯いた。

「何のことへ？」

だからこそ、毛利さんがそう言つた時、私は驚いた。

「あれは私がよろけただけ。新一が事故に巻き込まれたのは、私のせいなの」

「毛利さん、この人のこと庇つてんの？」

織田さんは田付きを鋭くさせた。

「正直に言つていいのよ。私はこの人に殺されそうになりました、つて」

そう言つと、織田さんは再び笑い声をあげた。

だけど、逆に彼女は表情を険しくさせた。

「志保さんがそんなことするわけないでしょー。本当にあの事故は、私がドジやつて起きただけなの」

その頃とした口調に、私は悟った。

彼女は気付いている。

私が彼女に殺意を抱いていたことも。

私が彼女を突き飛ばしたこと。

全てを知つたうえで、彼女は私を庇つてくれている。

だけど、織田さんは笑みを絶やさなかつた。

そして、先程と同じ口調のまま、私達一人にだけ聞こえるような声で囁いた。

「私、見ちゃつたんだよね。あんたが毛利さんの背中を押して、道路に突き飛ばしたところ」

背筋が凍るような感覚がした。

見られてた…？

「や、それは気のせいよー。きつと志保さんは、私を助けようとして

…」

毛利さんが反論しようとしていたけど、それより先に、私は動いていた。

彼女たちの前を遮つて、教室を飛び出した。

「志保さんー？」

後ろから彼女が私を呼びとめる声が聞こえてきた。

でも、振り向けなかつた。

私は重い足を無理矢理動かして走り続ける。

行先は…屋上。

私は屋上から下を見下ろした。

まだホームルームが始まる前。

遅刻ぎりぎりの生徒たちが駆けこんでいる様子が見えた。

あの中に、工藤君がいてくれたら…。

そんなことを考えてから、私はフツと笑つた。

手すりを越えて、空を見上げる。

青い空が眩しくて、目が痛くなつた。

そのまま、宙に向かつて一步踏み出した。

まるで、そこに地面があるかのよつ。

だけど地面なんてあるわけもなく、私の身体はゆっくりと前のめりになつた。

目を閉じて、少しだけ微笑んだ。

上方から、誰かの叫び声が聞こえてきた。

それでももつ、私の身体は止まらない。

工藤君

先に逝くわ
…

覚醒（前書き）

ここから新一の目線になります。

オレが田を覚ましたのは、事故から三日後だった。

ゆっくり瞬きを繰り返していると、久しぶりに見る両親の姿があった。

母さんはオレが起きたことに気付くと、歓声をあげてオレに抱きついた。

「新ちゃんー良かつた、気がついて」

相変わらずの元気ぶりに、オレは呆れつつも安心した。

けれど、別のことと思い出した。

「蘭は？あいつ無事か？」

「落ち着け、新ー」

父さんは冷静な口調でオレを窘めた。

「蘭君なら大丈夫だ。掠り傷一つない」

「や、そつか…」

オレはホッとして息を吐いた。

自分の身体を見下ろすと、所々に包帯がある。

頭に手をやれば、微かに痛みが走った。

「よく帰つて来れたな」

締め切りに追われて忙しいはずなの。」

「息子が事故に遭つたと聞いては、帰つて来ざるを得ないだら」
「どうだか」

オレはもう一度枕に頭を預けた。

「新ちゃん、いくら蘭ちゃんが危なかつたからって、もつ少し助ける方法があつたんじゃないの？」

「何だよ、それ」

「腕を引っ張るとか、抱きかかえてあげるとか……」

母さんの頗珍漢な言い分に、オレと父さんは何も言えなかつた。

「と、とにかく、新ちゃんが車の前に出るとはなかつたんじゃないからって言つてるのよー。」

「あの状況じゃ、蘭を更に強く押して、向いつ側まで追いやる」としかできなかつたんだよ」

父さんも頷いた。

「身を呈して女性を守る」ことができたのはいいことだ。が、今度は自分が怪我をしないようなやり方を選びなさい

そつ言つてオレの頭をポンと叩いた。

「蘭ちゃんが大好きなのはいいけど、こんな危ない」としがやダメ

よ

「べつ、別に好きじゃねえよ。」

「あら、赤くなっちゃって。可愛いんだから」

母さんがオレをシンとつねば、父さんも一緒になつて笑いだす。

これが久しぶりに会う親子の会話なんだつか…。

「それで、蘭は？」

「慌てないの。むつそろそろ来るわよ」

オレはぼんやりと時計を見た。

今頃、学校は帰りのホームルームの時間のさすだ。

となると、蘭が来るのは、早くても一時間は先だろ？

その間、オレは点滴やらマスクやらを受けてさせられた。

明日にはもつと色々な検査を受けなるだらうが、どうなることなら蘭に会いたい。

別に…心配してんだらうから、つてだけだけどな。

母さんがオレのベッドの脇でコンゴの皮を剥いていた頃、蘭はやつてきた。

「新一。」

そう呟んでから、ベッドから身を起してこらのオレを見て、まろまろと泣きだした。

「お、おー」

突然のことに対するおもむろとしたいふと、母さんが立ち上がり、「いやしながら病室を出でた。

「泣きやめよ」

「馬鹿……誰のせい……」

言いながら蘭は、涙をぬぐつた。

「「」めんね……」

「謝んなつつたる。お前のせこじやなこばへ」

オレがそう言つても、蘭はまだ泣いている。

「いじ加減に……」

言いかけたオレを遮つて、蘭は震える声で漏らした。

「私、新一だけじゃなくて……志保ちゃんもで……」

「富野？」

思わぬ名前に、オレは聞を返した。

「富野がどうかしたのか？」

更にたずねてみたが、蘭は答えない。

「蘭…」

背中下手をあて、そつと襷でてやる。

「しばらくすると、蘭は呟いた。

「志保さんが、学校の屋上から飛び降りたの

大事な

蘭から富野のことを聞いて、オレ達は病室を飛び出した。

外で耳を欹てていたらしく母さんが驚いていたけど、氣にしちゃいられない。

何で富野が自殺なんか…。

嘘だろ？

「やつと私のせいだ…」

蘭はまだ泣いていた。

「私が志保さんのこと、追い詰めちゃったんだ」

「何言ってんだよ。あいつはそこまで弱い奴じゃねえよ」

だからこそ、不安だった。

普段は無表情で何を考えているかわからんねえけど、あいつは自殺をしようと思つほど馬鹿じやない。

何かあつたんだ。

だけど、蘭はそのことについては話してくれない。

「下が植木になつてたから助かったの。でもまだ目を覚まさなくて

…

そつと泣いながら、しきりに涙をぬぐっていた。

宮野志保と書かれた札のある部屋の中。

その中に、阿笠博士が呆然としながら座っていた。

「博士」

オレはそっと声をかけた。

博士はぼんやりとこちらを見た。

少しだけやつれでいるような気がする。

「ああ、新一君か… やつを優作君が来て、君が田を覚ましたことを
聞いたんじやが、志保君がこの状態で、いけなくての…」

「そんなことはどうでもいい！ いきなりどうしたんだよー…？」

思わず怒鳴った。

でも、博士は首を横に振った。

「わからん。一昨日、急に学校から電話がきて…。志保君が屋上から落ちて怪我をしたと言つもんじやから、わしも混乱しとる。当の本人は起きる気配すらない」

博士は宮野の頬に触れた。

「わしがいけなかつたんぢやうつか…」。この子は優しくからの、辛いことも全て自分の中にしまここんでしまつ。何かあっても、わしこは句も話してくれん…」

「博士は悪くねえよ。こいつが起きてからでも話は聞けるだら」

そつは言つもの、内心では無理だとわかつていた。

富野は昔から、自分の心は誰にも開かない。

家族がいなさいせいもあるだらうけど、とにかく素直じゃない。

そんなここと聞いてただしたといひで、本当のことを言つとも思えない。

「わしがこいつそりすき焼き弁当を食べたのがいけなかつたのかの…、黙つてチヨコレートパフュを食べたことかの…それとも、コーラを…」

「もういいよ、博士」

震える博士の背中を、オレは撫でた。

蘭が静かに隣に来て、富野の手を取つた。

「志保君の友達か?」

博士が蘭を見てたずねた。

「毛利蘭といいます」

「ああ…新一君がよく話しておつた、幼馴染の…」

蘭はきょとんとして、チラッとオレを見た。

だけどオレは、すぐに田を逸らした。

「友だちが来てくれれば、志保君も喜ぶじゃん...早く田を覚ましてくれるかもしれんの」

「そうですね」

真剣な田で面野の手を握る蘭。

オレも、祈らなくちゃ。

神様なんて普段は信じじやいねえけど、今は別だ。

オレは面野の反対の手を取つて、ぎゅっと握った。

このまま死ぬんじゃねえぞ、絶対。

お前も、オレの大事な幼馴染なんだからよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0237ba/>

哀しき愛

2012年1月10日15時46分発行